

ヤマト福祉財団NEWS

Yamato Welfare Foundation 2008 Spring

4月20日発行 No18

特集
interview

「活気があってヤマトの職場と一緒にだな」 山崎理事長 障がい者生活の前線をあぐる



武蔵野千川福祉会の就労事業所「チャレンジャー」で、施設長の新堂薫さん(左)から説明を受ける山崎理事長

福祉はロマンだ! Series09

ヤマト福祉財団 小倉昌男賞 受賞者は今…

3年間で『障がい者月収5万円』を実現

太田勇さん

(財)東京しごと財団 心身障害者職能開発センター
委託訓練推進班コーディネーター

感謝を込めて 丸山一郎さん追悼

この街で一緒に生きていく
障がい者のクロネコメール便
配達

「ありがとう」と言われる仕事——
障がい者のメール便配達事業を
もっと広げていきたい。

ヤマト運輸(株)・木川眞社長が「らいむ」を訪問

YWF TOPICS

特集

interview

「活気があつてヤマトの職場と一緒だな」

山崎理事長 障がい者生活の前線をあゝく

山崎篤理事長は1月下旬、障がい者福祉の現場である共同作業所、養護学校、グループホームなど、東京都内5施設を訪問しました。12年前に小倉前理事長が訪れたコースと同じです。山崎理事長が感じた「福祉の現場の変化と、これから」について、現地を案内された、きょうされんの川久保事務局次長に聞いていただきました。

聞き手

川久保陽子氏

きょうされん事務局次長



山崎篤 ヤマト福祉財団理事長

「靴を持ったことがない」という現実

川久保事務局次長（以下敬称略）…今回、小倉前理事長が12年前にご覧になった施設を初めて回られていかがでしたか？

山崎理事長（以下敬称略）…小倉前理事長が福祉の現場をどう感じられていたかを考えると、とても興味深いものがありました。12年の間に、着実によくなったところはあつたと思いますが…。川久保…間違いなくそうですね。高い給料を払えるようにきちつとしないといけない、という点など。

山崎…しかし一方で、私たち財団が設立の趣意書で謳ったことの重みを、現場に立つてあらためて感じました。実際にさまざまな動きや成果はありますが、日常的に街中で、障がいのある方を目にしたり接する機会は少なくて、世の中の福祉に対する意識をまだまだ高めなくてはいいけないと痛感しました。最近の

話ですが、ある障がい者から「靴を持ったことがない」と聞いたときはショックでした。川久保…外に出ていないということですね。

山崎…最初にお伺いした小平養護学校は主に肢体不自由の小学生が通う学校。小平市のみならず近隣の計9市よりスクールバスをつかつて大半の生徒が通学しています。養護学校が地域から離れているという証ですね。だから通学時間にしても物凄く制限されてしまうし、障がいのあるなしにかかわらず、地域で同年代の子と遊ぶことも難しい。昨年、我が国も署名した「障害者の権利条約」によつて、統合教育への流れが加速すると思いますが、まだどのような形になるのか定かではありません。社会全体でこういう方々をどうお手伝いするべきか…。



川久保陽子 きょうされん事務局次長

給食一つとっても、アレルギーの問題やかみ砕けない人のためにさまざまなメニューを用意するなど、こうした個別ケアを一般校で対応することが容易で

自立までにもう少し、その人なりの踊り場があってもいい

川久保…そうですね。卒業後の進路も企業への就職はごくわずかです。「養護学校を卒業した後、家にいるだけでは筋力も低下してしまう。せっかく学校で身につけたものが活かせない」という親の思いから多くの小規模作業所ができてきたのが、これまでの流れです。

山崎…ちょうど30年位前に養護学校の義務化があり、外へ外へという動きがありました。今はまだその先の作業所に閉じこもっているように感じます。

はないのも事実でしょう。ですが、たまたま孫と同世代の子どもたちに接して、より以上に社会全体で関わっていくことの重要性を感じました。

だからといって、養護学校のマンツーマン的な手厚いフォローから、卒業した途端にいきなり「さあ」と、ゼロベースで一般社会に溶け込みなさいと言っても、ギャップがありすぎますよね。

街で障がいのある人を見かけない、というのが小倉前理事長の最初のクエスチョンでした。バリアフリーはかなり進みましたが、一般の人の関心だとか、どう手助けすればいいかといったノウハウがまだ広まっていま

せん。

川久保…目の不自由な人が白杖をついて横断歩道に立っていても「お手伝いしますか？」と声をかけてくれる人は、本当になんとも聞きます。

山崎…お手伝いする気持ちはあっても、いざというときに構えてしまう。お互い経験して慣れていく大事な時期なのかなとも思います。

そういう意味でも養護学校の良さと卒業後の進路がうまくつながり、社会に出て働くことが当たり前になることの意義は大きいと思います。双方にとって。そのためにも、環境なり手助

期待に応えて、作業所も選ばれる時代

川久保…つぎにご覧になった「チャレンジャー」はいかがでしたか？

山崎…第一印象は、ヤマトの職場と一緒に感じました。活気があって、動きもキビキビして。機械化も進み、作業も創意工夫されている…。

川久保…武蔵野千川福祉会では、それぞれの意欲や能力に合わせて作業所を四つ用意し、機能を分化させています。

山崎…そうですね。いろんな段階、いろんなメニューの仕事を揃えることは大事だと強く感じ

財団法人 ヤマト福祉財団 設立趣意書

経済大国となった現在の日本においては、モノに対する欲求は満たされ、人々の志向は潤いのある人間性豊かな生活へと向かっております。ところが、一方で心身に障害を持つが故に社会的にも経済的にも自立することが困難で、豊かでゆとりある生活には程遠い人々が多数おられることも事実であります。

今、この障害を持つ方々に最も求められている事は、戸外に出て社会の風にあたる機会を少しでも多くもつことであります。日本を訪れる外国人は、街の中で障害者に出会うことが、非常に少ないと言っております。これはいかに障害者が家の中に閉じ籠もっているかを裏付けていると言えます。これを解消するためには、障害者が自立してゆける社会基盤の整備を推進することが必要であります。

企業は本来、社会に対して安価で良質な製品を安定的に供給することがひとつの使命とされており、近年は社会の一員として社会貢献活動に取り組むことも企業の重要な社会的責務であるとの認識が定着しつつあります。

それで、こうした社会的責務を果たし、障害者が家庭や地域社会において、明るく暮らしてゆける社会環境作りへの努力を、未永く安定的に支援するため、ここに財団法人 ヤマト福祉財団を設立しようとするものであります。

ける人なりを整備し、卒業後の自立に向けた、もうひとつといくつかのステップ、その人なりの踊り場があってもいいと思います。

してつくったのが「チャレンジャー」だそうです。

山崎…きょうされんとしては、今後の作業所の機能分化について、どのような方向性を打ち出しているのですか？

川久保…一つひとつの施設がすべての環境を整えていくことは容易ではありません。そこで、一つの作業所が単独でがんばるのではなく、その地域一帯の作業所どうしが横の連携を図りながら役割分担をすることで、地域内で機能分化を実現させる方法を、提案しています。つまり、それぞれの設立母体はちがっていても、地域の中で分担しながらやっていきますか、という事です。

「チャレンジャー」はそうした考え方でつくられた施設です。また、2004年度から始まった福祉施設のメール便配達

事業に真っ先に取り組み、ヤマト運輸の契約社員となった人も生まれています。

山崎…手前味噌になるけれど、メール便配達に挑戦してください。その後の一般就労につながっているそうです。私たちとしても、とても嬉しいことと大歓迎しています。

「チャレンジャー」でお聞きした話ですが、2008年4月から養護学校を卒業した生徒に希望進路を聞くと8名のうち、

7名がチャレンジャーを希望したそうです。現在の障害者自立支援法はさまざまな問題をはら

んでいますが、ある面では障がい者が、生きがいや働きがい、自分に自信を持つという、当り前のことを求める時代に変えま

保障するためには、良い仕事が必要であり、それを応援するの

働くこと、暮らすこと

障がい者の率直な願いにどう応えるか

川久保…今回の見学で他に印象に残ったことはありますか？

山崎…重度の方が主となる府中共同作業所では、「働きたい」という欲求は、障がいの度合いに関わりなく、誰でも持っているものなのだと感動しました。

もちろん作業における「福祉

が私たちの役割になってくると思います。

「雇用」のバランスは変わりますが、自助具をうまく利用した

り、適切な手助けをすれば、働く喜びを獲得できることを示しているように思いました。最初からその能力や可能性を否定することのないよう、意識をあらためる必要がありますね。それ

ともう一つ、介護の問題とも共通しますが、志を持って、こうした作業所でがんばる職員さんたちの待遇を見合ったものにすることも大事だと感じました。

川久保…以前、小倉前理事長も収益を上げるよう職員が努力しても、その結果が職員給与に反映されないことをおかしいと指摘されていました。

山崎…ええ、これも社会の宿題ですね。それとグループホームの「共同ホームサンライズ」では、入居者の「おしゃれに気を回せるようになった」という言葉が印象的でした。

川久保…こちらは普通のアパートを棟借り上げて、一人暮らしがしたい障がい者の方々に入居していただき、スタッフが最低限の食事提供や服薬管理などの支援を行っているそうです。



府中共同作業所

重度肢体障がい者を主な利用者とする通所型の授産施設。利用者の2/3は自力での移動が困難だが、働きたいというニーズを大切にしながら意欲的な取り組みを続けている。



都立小平養護学校

肢体不自由障がいのある児童・生徒を中心にした養護学校で、1951年に開校。小学部1年生から高等部3年生まで約180名が在籍し、通学区域は9市にまたがる。



共同ホーム サンライズ

精神障がい者の福祉ホームとして開設。バス・トイレ付きの完全個室で、利用者は朝・夕の食事提供、医療相談などの日常生活支援が受けられる。



チャレンジャー

武蔵野千川福祉会が運営する就労事業所の一つ。福祉会には四つの就労事業所があり、利用者がそれぞれの能力と意欲に合わせて働くシステム(機能分化)をとっている。



国立精神・神経センター

精神疾患や神経疾患、筋疾患ならびに知的障がい等の診断・治療を行う国立高度専門医療センター(ナショナルセンター)。

山崎…聞くと、先に一人暮らしを始めた人に刺激を受けて、かつて一緒に共同生活をしていた他のメンバーが「自分にもできるかも」と、一歩高いステップに飛びだす勇氣を持つ波及効果があったそうです。

川久保…私も当事者の方とお話をしていて「ひとりぼっちじゃない一人暮らしがしたい」という言葉を聞き、その思いに震えたことがあります。が、「サンライズ」はまさにそれを実現している気がします。

山崎…最後に国立精神・神経センター(NCNP)ですが、ここでは、精神障がいに対する日本のこれまでの無理解をあらためて学びました。たとえば入院日数の異常な長さ。OECD加盟国はいずれもおおよそ20日なのに対し、日本の精神科病院の平均在院日数は350日以上と10倍以上。NCNPではこれを短くするよう取り組まれているそうですが、精神面の病気に對して社会がもっと勉強し、社会参加を促すようなシステムを定着させる必要があります。この世の中で、無関心ほど悲惨なことはありません。

小倉前理事長の目指した社会の実現に向けて、私たちにできることを一層努めていきたいと思っています。

ヤマト福祉財団 小倉昌男賞 受賞者は今……

3年間で

『障がい者月収5万円』を実現

第6回受賞者 太田 勇さん

(財)東京しごと財団 心身障害者職能開発センター
委託訓練推進班コーディネーター



『小倉昌男の福祉革命』に衝撃

小倉昌男の『福祉革命』のサブタイトルは「障害者月給一万円からの脱出」。本の中で漫画

家山本おさむは、「宅急便の小倉昌男がヤマト運輸会長を退いて飛び込んだのは福祉の世界。だが、障害者の給与が平均一万円に満たないことや、それが『仕方ない』で済まされていることに怒り心頭」と解説しています。読んだ太田さんはつよいショックを受けます。当時「すまいる」の施設長。早速、スタッフ12人に本を買い与え、「小倉さんは福祉についてはいわば素人。その素人が福祉の現場で10年、20年働いてきたわれわれにこの本

「二読、ああやられちゃった! というのがそのときの率直な感想」だったと太田さんは語ります。そのときは、小学館文庫『小倉昌男の福祉革命』(建野友保著)を読んだとき。2001年1月のこと。やがて、施設利用者の月収5万円実現に向けた知的障害者授産施設「すまいる」(東京・調布市)の『バイバイプロジェクト』が動きだす。第6回ヤマト福祉財団小倉昌男賞受賞者、太田勇さん(66歳)に登場していただきます。

を通じて大きなテーマを投げかけた。どう受け止めるか。読んで感想文を書いてほしい」と指示します。

もし、スタッフの過半数が小倉の言うことに共感してくれたら、「すまいる」はなんとかやれるんじゃないか。太田さんはひそかにそう考えた。結果は、ほとんどのスタッフが小倉の「憤激」に心を動かされる。障がい者の月収がなぜ5千円、1万円どまりなのか。福祉の世界の人間にはそれを改善する力がないのか。じゃあそれをわれわれでやるうではないか……。

ヤマト福祉財団のパワーアップセミナーで指導を受けた大塚由紀子さん(経営コンサルタント・福祉ベンチャーパートナーズ代表)に協力を求め、施設内に全員参加のプロジェクトチームを立ち上げる。名づけて『利用者の月額工賃5万円を実現するバイバイプロジェクト』。2002年4月でした。

目標年度の2005年4月を目ざし、利用者(障がい者)、職員、ボランティア一体となった「すまいる」の製造、販売活動が展開されます。そしてスタート時点の1日売上げ5万円余が、1年目6万5千円、2年目10万5千円、3年目12万5千円と急角度の右肩上がりに。利用者の月収も、当初1万円余であったものが3年目には5万2千円に。見事に目標達成!



● 調布すまいる・2階にパン工房がある

「パン仕事は立ち仕事ですからやはり辛いですよ。パン工房は朝早くから休憩時間もなくパンづくりに励む。売りに行く人だつて昼食どきが勝負だから、帰ってくるのは1時半、2時になる。いつも冷めた昼食を食べる」と太田さんは言う。



● 「すまパン」づくりに励むメンバー

「施設は働く場所」

へと意識変革

月 収5万円はどうして実現できたか。まず、目標に向けて関係者が一つになったこと。活動を通じて施設「すまいる」は遊びにくる場所ではなく、働く場所なんだという意識を利用者自身が理屈でなく体験の中で身につけていったこと。働く喜び、売れる喜び、収入が増える喜びを知らようになったこと（当初のころは家族会や職員の中にすら、太田さん、電卓なんか叩いて売上勘定に熱中しているけど、私たちはお金

儲けじゃなく福祉

をしてるんですよ、と文句を言う人たちがいた。福祉をやるためにここに来ているんだと）。

「パン仕事は立

ち仕事ですから

は辛いですよ。

パン工房は朝早く

から休憩時間もな

くパンづくりに励

む。売りに行く人

だつて昼食どきが

第2に販売先に恵まれたこと。「すまいる」が所在する地域は旧米軍基地跡地。その一角に東京外語大学が引っ越してきた。学生数4300名。大学側の理解を得てキャンパス内で出張販売を始めた当初は、まだ利用者の工賃をレベルアップしようという問題意識はなかった。ところが『バイバイプロジェクト』のスタートを機に意識変革と販売方法の工夫などで売れ行き急増。さらに国際基督教大学、外資系損保アメリカンファミリーなどの売場提供の協力が加わる。

福祉へのスタート

太田 勇さんは変わり種とい

えばちょっと変わり種。話を

聞いていると「人生は長い。

悠々人生」という言葉が浮かびま

す。出身は東京都。大学を出ると

JICA国際協力事業団・現在に

勤務、そこに約5年。退職して再

び大学に戻って約4年。東京の人

込みと喧噪がイヤになる。少し落

ち着いたところで働けたらいいな、

と思う。たまたま伊豆大島の椿祭

りに一人旅。そこで藤倉学園（川

田仁子園長）に出会う。あ、ここ

に私立の中・高校があると思つて

門を叩いたらさくらさく、滝野川学園などに次いで日本で4番目に古

午前11時、各販売先にパン300個ずつを一斉に運び込む。全部売り切れたときにはみんなでパンザイ。

第3には、プロジェクト構築、推進のよき指導者を得たこと。この事業にはヤマト福祉財団も助成金で支援しました。

「さらに高い工賃を目ざす」と太田さんは言います。「ということとは、単に授産工賃が多いことを誇ったにそれ満足するのではなく、利用者が主体性を持つてゆたかな生活を実現していく上での大切なプロセスであり、ノーマライゼーションの実現にもつながることだから」と。

伊豆大島

つたらいっ辞めてもいいから是非、というつよい誘いもあったその学園に就職します。1975年、運命的といえは運命的な太田さんの「福祉人生」の始まりでした。

おなじころ、良き伴侶を得て大

島での新婚生活。「とにかく気に入

っちゃった、島が。岡田港近くの

農家に間借りしていたが、雑木林

に囲まれていて、夜、隣家の灯り

も見えない。もっとも妻は怖がる。

海洋性のつよい大粒の雨がトタン

葺きの屋根を叩く夜などはとくに

：「と当時をしのぶ太田さん。結

局、伊豆大島に8年間も居つきま

した。転機到来は、障がい者福祉の世



● 山梨そだち園・開園15周年記念の集いで太田さん



● 大島藤倉学園・島のお正月のもちつき

界では名の知られた山梨・そだち園の田ヶ谷雅夫園長と知り合ったこと。家庭的な雰囲気のごちままりした施設をつくりたいという田ヶ谷理論に共鳴。1981年、藤倉学園を退職してそだち園入りします。行動力ゆたかな園長の下で3年、一生懸命働くが疲れ果て、退職。そして生活のために新たに得た仕事は、ある損保会社の代理



● 飯田橋にある「東京しごと財団」



● すまいる・パイ
パイプロジェクトを支えたス
タッフ。後列右
から2番目が太
田さん

一般就労への流れの中で

現 在、太田さんは、財団法人東京しごと財団心身障害者職能開発センターで、障がい者就労のための委託訓練コーディネーターとして活躍しています。

う時代に入っている。ところが実情は、たとえば養護学校から進路指導を経て企業にそのまま就職できるかというと、よくて20パーセント（全国平均）、あとはやむなく福祉施設へ。そのまんま5年、10年という生活が続く。これではますます障がい者と一般企業が分離していく。福祉就労から一般就

店経営。それも働く場所は自ら求めて長野県松本市。単身赴任だったが、お城や食べ物、北アルプスの山々などの環境に恵まれて7年間を過ごします。そして請われて再びそだち園に施設長として復帰。6年間をそこで活躍した後、2000年、調布市基地跡地に完成し

た「すまいる」に太田さんは施設長として転じます。面白いのは（とは本人の弁）、大島藤倉学園は古典型、山梨そだち園は保護者中心型、調布すまいるは行政中心型と三者三様であること。太田さんはこの三つのタイプをそれぞれ「転戦」したわけだ。

「憐れみ」ではなく「機会」を

労へといっても進まない。ではどうするか。そこで国が考えたのが仕事に就く前の職業準備訓練。訓練にはパソコン講座などの知識・技能習得、物流作業などの実践能力

力習得の2コースがあり、企業や団体の協力を得て委託訓練を実施しています。企業などを巡回しての訓練の相談・指導が今の太田さんの仕事。

—— 通りインタビューを終え、太田さんに「あなたの障がい者福祉哲学は？」と問うてみました。以下はそれに応じての太田勇語録。

「以前、私は、自分の名刺のウラに英文で『憐れみとか慈善ではなく、機会をください』ということばを印刷していた。これは企業に、障がい者に対してもっと門戸を開いてください、ということなんです。チャンスがあれば何度でもチャレンジしていく。一方、自立に向かっている人には、福祉施設に入っ

たからもういいの、という時代はもう終わっているということ。地域の中でどういふふうに分らしさを生かしながら生きていくか。独りでは生きていけない。どんなサービスが必要か、車椅子の人も知的障がい者も精神の人も、お互いに考え地域社会の中で活動していく。そういう場、機会が広がればそこにまた新しい問題や展望が浮かび上がってくる」

「むずかしいのはハード面より心のバリアフリー。これも王道というか、これをやれば解決するというものはなかなかない。時間はかかるが、一緒に働く機会、生活を共にする機会をつくり重ねていくしかない。そこで両者間の誤解や偏見を克服していく」

取材・文 高田 三省

感謝を込めて

丸山一郎さん 追悼

埼玉県立大学教授で当財団の設立いろいろの理事であられた丸山一郎氏が、3月2日、東京都内のご自宅で悪性腫瘍のため逝去されました。享年65歳でした。寄稿された文の中にあるように障がい者福祉の分野で多くの功績をのこされました。ここに謹んで哀悼の意を表し、ご冥福をお祈りいたします。



ヤマト福祉財団小倉昌男賞贈呈式で
(昨年12月)

丸山さんのご遺志を 今後の支援活動に生かしたい

ヤマト福祉財団理事長 山崎 篤

丸山一郎さんは当財団の設立時からご尽力をいただき、理事としてまた、助成事業の選考委員として、福祉の専門家の立場から多くのご指導・ご助言をいただきました。大変お世話になり、感謝の念に堪えません。

去る2月18日、財団の理事会に、出席のご返事をいただいていたのですが、体調をくずされ出席がかなわず、約2週間後の3月2日に帰らぬ人となりました。本当に残念です。

昨年12月、「第8回ヤマト福祉財団小

倉昌男賞特別賞」受賞のあいさつの中で、43年前、通訳ボランティアとして参加した「東京パラリンピック」で、病院や施設から出場する日本選手と、障がいがありながら職業につき社会参加をしている欧米選手の違い、それぞれを取り巻く社会環境の落差は30年から50年の開きがあることに愕然としたと話されていました。

これをきっかけに障がい者支援の道に進まれ、障がい者福祉事業の現場から、また厚生省の障害福祉専門官の立

場から、さらに埼玉県立大学教授として人材育成の面から、障がい者の権利擁護と豊かな生活実現のため、精力的に行動され、さまざまな障がい者施策・就労支援を推進してこられました。

丸山さんの功績は一言では尽くせないほど大きいものです。丸山さんの障がい者の権利擁護のためには一歩も退かぬ強い意思と熱情を私たちも引き継ぎ、今後の支援活動に生かしていきます。心から哀悼の意を表しご冥福をお祈りいたします。



築地本願寺和田堀廟所での葬儀には皇后陛下より御下賜された生花が供えられました



2004年 アジア・太平洋障害者の10年 キャンペーン会議（シンガポール）に出席した丸山一郎さん（写真右）

本誌11号（2006年7月20日発刊）の特集「障害者自立支援法の光と影」に登場していただいた丸山一郎さん



丸山一郎さんを偲ぶ 最期までILOへの提訴に熱い思い

きょうされん常務理事 藤井克徳

昨年4月15日、穏やかな日曜日の日だった。陽が傾きかけた頃に、丸山一郎さんからの電話が鳴った。「二つ大切なことを話したい。一つは、今日が調一興さんの二回目の命日。もう一つは、数日前に膵臓癌の診断が下された」

こう切り出したのである。一瞬、返答に窮した。「暗黒の臓器」と称されている膵臓であり、悪性腫瘍と判った時点で極めて厳しい状況にあるのではという知識が脳裏をよぎったからである。電話の向こうの口調は、いつになく淡々としていた。今にして思えば、診断後の数日間うちに凝縮した葛藤と混乱を重ね、もしかしたら既に過酷な現実を受け入れていたのかもしれない。

病根による蝕みは、発覚して一年間の猶予をも許さなかった。去る3月2日午後4時40分過ぎ、自宅で眠るようにして息を引きとったという（享年65歳）。小生と最期の言葉を交わしたのが2月22日だった。「10日間ほど海外に行ってきます。帰ったらすぐに顔を出します」と告げると、はつきりとした口調で「どこへ行くの」と問い返し、しっかりと手を握り返してくれた。悲報に接したのは、帰国の航空機に乗り込

む直前で、一日違いで最期には間に合わなかった。

紙幅の限りで丸山一郎さんを偲んでみたい。丸山さんを一口で言い表すのは至難であるが、もしそれが許されたとしたら次のように記したい。情熱と知性、そしてユーモアを、人格という器にはち切れんばかりに詰め込んだような人間だったと。生き方も稀有なほどに多彩であったが、このことは職歴にも表れている。ゼンコロに在籍しながら福祉向上の責任者を担い、障害分野では初の民間からの厚生省専門官に抜擢された。全国社会福祉協議会や日本障害者リハビリテーション協会の要職を経て、晩年は埼玉県立大学の開校準備に尽力した。同大学の教授職のままで、また日本障害者協議会の副代表をはじめ数々の民間団体の役職のままで姿を消したのである。加えて、卓越した国際感覚と英語力で、海外とを繋ぐ上での接点としての役割を果たしたことも衆目の一致するところであろう。ヤマト福祉財団との関係も密であった。財団の創設準備時に全社協の障害福祉部長であった丸山さんは、独創的な財団としたいとする故小倉昌男さんの意を汲んで、惜しみなく心血を注い

だ。財団設立後も役員（理事）を務め、昨秋にはそれまでの障害分野での傑出した活躍に対して「第8回ヤマト福祉財団 小倉昌男賞特別賞」が贈られた。そんな丸山さんが、わが国の障害分野に歴史的な宿題を残していた。ILO159号条約（障害者の職業リハビリテーション及び雇用に関する条約）に関する提訴状の主筆を振るい、条約違反で日本政府に真面向から挑んだのである。障害者の雇用政策の低劣さを憂い、病床に伏してからもそのための準備と対策に余念がなかった。既に申し立て書は受理されていたが、審査結果についての吉報を耳にするには至らなかった。結果の如何に関わらず、障害者の就労政策のあり方に一石を投じたことは間違いない。どのような判断が下されるにせよ、本物の「闘い」はこれからとなる。天国から身を乗り出すようにして、娑婆での事の成り行きを見守る丸山さんの姿が胸に浮かぶようだ。障害分野の関係者にはその遺志を継承してもらいたく、本誌読者をはじめ多くのみなさんにも関心と支援を寄せていただきたい。ご冥福をお祈りします。

この街で、
一緒に生きていく。



(財)ヤマト福祉財団
障がい者のクロネコメール便配達事業

「ありがとう」と言われる仕事—— 障がい者のメール便配達事業を もっと広げていきたい。

ヤマト運輸(株)・木川眞社長が『らいむ』を訪問



障がい者のクロネコメール便配達事業
が評価され、ヤマト運輸(株)が
第五回企業フィランソपी大賞の
特別賞「社会共生賞」を受賞。

「現場で頑張ってください」と、
皆さんの声を直接聞きたい」と、
木川眞社長が障がい者就労支援
センター『らいむ』を訪れました。

経営だけでなく環境や社会の視点から、
本業を生かして「社会性」「先駆性」「波
及性」に富む行動をしている企業に贈ら
れる企業フィランソピー大賞。その特別
賞「社会共生賞」をヤマト運輸(株)が受
賞しました。

「受賞は、現場でメール便を配達してくだ
さっている皆さんの頑張り」と、この事業が
根づいてきていることが評価されたもの。
ぜひ皆さんの声を直接伺いたい——こん
な木川眞社長の強い思いから、『らいむ』訪
問が実現しました。

出迎えた『らいむ』の天野貴彦センター

長は、05年の第5回ヤマト福祉財団賞の
受賞者でもあります。

『らいむ』は05年3月にメール便配達事
業に参入し、07年1月には配達エリア内に
スワンカフェ&ベーカリー町田店を開設。メ
ール便配達の拠点をスワン町田店に移し
ました。メール便配達事業とスワンベーカ
リー事業を一緒に展開している施設は、全
国でも珍しいケースです。

「メール便配達は月曜日から金曜日ま
での週5日、冊数は1日平均約200冊。
メリットは、1冊あたりの単価が一般の配達
員と同じだということ、何人かのグループ
で取り組めること、それぞれの障がいの特
性にに応じて作業の細分化ができること、そ
して配達を通じて地域の皆さんと交流が
できることです」(天野センター長)

木川社長の「授賞式で、ぜひ現場の皆さん
の声を届けたい」と思い、今日お伺いしまし
た」の言葉で、クロネコメイトさんたちの
懇談会が始まりました。

●らいむ (東京都町田市)

就労継続支援事業所
(登録者約400名)
社会福祉法人ウイズ町田
2005年3月メール便配達開始。
クロネコメイトは5名。07年1月には
スワンベーカリー&カフェをオープン。



「障がい者のクロネコメール便配達事業」
お問い合わせは……(財)ヤマト福祉財団 押尾
TEL 03-3248-0691 FAX 03-3542-5165
e-mail y.zaidan@yamatofukushizaidan.or.jp



(右) スワンカフェ＆ベーカリー町田店で懇談する木川社長(右から3番目)と『らいむ』のメイトさんたち。手前左から2番目は天野センター長

(左) 配達をするメール便は、スワンベーカリーのスタッフが受け取ります



メール便配達を通して 育まれた喜びと自信

現在、『らいむ』でメール便配達に従事しているメイトさんは、下鵜瀬健司さん、鈴木耕介さん、大平雄一郎さん、木澤真さん、小野田裕さんの5名。下鵜瀬さんは『らいむ』の登録者でしたが、05年7月からはメール便配達事業専任の職員として、メンバーをまとめ、サポートする立場になりました。ウド“が愛称の鈴木さんは、3年前『らいむ』に登録した当初は仕事どころではなかったそうです。

「『らいむ』に来るのも精一杯。施設内にいることもできずに一緒に公園を散歩して過ごしていました。それが今では本当にメール便配達のトップランナーになって、スワンベーカリーの仕事もこなしている。その成長ぶりが本当に嬉しい」と天野センター長。最年長の大平さんは、病気のため、勤務するの”2年の壁“があったそうです。



木川社長「苦労したこと、つらかったことは何ですか？」
下鵜瀬さん「やはりクレームがあったときです。宛て先が不明だったり、番地やアパートの部屋番号がわからないときは非常に困ります。でも、ヤマト運輸のドライバーの方が“わからないときには遠慮なく電話してください”と言って、親切丁寧に教えてくれます。それが本当に嬉しくて感謝の気持ちでいっぱいです」

木川社長「逆」に、メール便の配達をしていて一番嬉しかったことは？
大平さん「以前、チラシ配りの仕事をしていたときには、怒られたり、不審に思われることもありました。メール便の配達は、ヤマトの制服を着てやれるので、皆さんから“ご苦労さま”と言ってもらえる。それが本当に嬉しいです」
木澤さん「配達中、子供が蹴ったボールが飛んできて、慌てて自転車を止めた時、その子のお母さんから“ごめんなさい。頑張ってくださいね”と言われ、感激しました。メール便をやってきてよかったと、生きがいを感じました」
木川社長「今後の目標、将来の夢は何ですか？」
木澤さん「5年後、10年後には、クロネコメイトではなく、ヤマト運輸の社員の制服を着て働きたい。これがゴールとは考えていないので」
天野センター長「この仕事をひとつのステップにして、本当の意味での一般就労につなげていくことが目標なんです」
木川社長の「頑張ってください」の言葉に、メイトさん全員が「頑張ります！」と元気に答え、ひとりひとりと握手を交わして、

メール便配達事業を広める 意義を再確認できました

メール便配達はもう3年目に突入。「2年の壁を乗り越えられたことで、自信も出てきました」と笑顔で話します。
木澤さんは過去に郵便局で年末年始の配達のアルバイトをしていた経験をかわれて、06年7月からメンバーになりました。
そして“ルーキー”の小野田さんは、まだ徒歩での配達ですが、嬉しいのは「間違いなく配達できたときです」

(上) メール便を配達するウドさん。住所を確認し、確実に郵便受けに入れていきます
(下) 棚を利用して番地ごとに仕分け作業を行う、最年長の大平さん



企業フィランソピー大賞の贈呈式に臨んだ木川社長。右は社団法人日本フィランソピー協会会長を務める浅野史郎さん（慶応義塾大学教授・元宮城県知事）



座談会は終了。続いて木川社長は、鈴木さんのメール便配達に同行し、その様子を見学しました。

”ウド“さんが読み取り機を使いながら的確に配達していく姿に、下鵜瀬さんが「メール便配達で、人がこんなに変わるんだナ……」とつぶやくと、天野センター長は「そういうあなた自身が変わっちゃった」と笑顔を浮かべました。

『らいむ』訪問を終えた木川社長は、その感想をこう述べます。

「つらいことがいっぱいあったはずなのに、それ以上に喜びや自信が表に出てきてい

る。やっていて“ありがとう”と言われる仕事は、本当に少ないもの。こういう仕事ができる機会をつくること自体、すごく意義のあることだと再確認できました」

2月28日にプレスセンター（東京都千代田区）で開催された、

企業フィランソピー大賞・

特別賞 “社会共生賞” の贈呈式ならびにレセプション。

その受賞挨拶のなかで、木川社長は次のように語りました。

「ヤマトグループ16万社員の気持ちと、福祉作業所の職員の皆さんを含め、受賞の対象となったこのメール便配達事業に携わるすべての皆さんの気持ちを代表して、厚くお礼を申し上げます。」社会共生賞 “という名前に、実はすごくしびれました。

ヤマト運輸としての社会貢献活動、障害者雇用の活動は、小倉昌男が経営の一線から退いて、ヤマト福祉財団を立ち上げた93年から始まっています。働く場所を提供するだけでは何の意味もない。自立できるぐらいの収入を得られるようになっていただきたい。これを大きなテーマにしています。

この受賞を機に、“いいことをやっているんだ”ということを確信しながら、さらにこの事業を進めていきたいと思っています」

メール便配達の様子を見学する木川社長。下鵜瀬さんの「メール便配達を通して、みんなが成長していることを実感しています」との言葉に大きく頷きました



地域と障がい者を結ぶ映画 「ふるさとをください」 期待を込めて自主上映開始

精神障がい者への偏見や誤解の問題をテーマにした「ふるさとをください」の上映会が全国でスタートしました。チラシ配布からチケット販売などすべてが手作りの自主上映形式。チケット収入は、施設の収入となる仕組みです。地域住民の視点から書かれたジェームス三木さんの脚本は笑って泣けるハートウォーミングなドラマ仕立て。上映会に携わる当事者や支援者のみなさんは、ひとりでも多くの人に相互理解が進むことを期待して全国各地で持ち回り上映をします。

● 5月からの上映予定

開催日	都道府県	会場
5月	11日 愛媛県	コスモスホール三間
	31日 栃木県	真岡市民会館 小ホール
6月	7日 大阪府	堺市総合福祉会館
	広島県	広島YMCAホール
	広島県	くすのきプラザ
	7・8日 愛媛県	近永公民館、吉田公民館
		大阪府 平野区画整理記念会館
	14日 大阪府	堺市立梅文化会館
	広島県	安佐北区地域福祉センター
	15日 京都府	京都教育文化センター
		愛媛県 南予文化会館
		広島県 左東公民館
		広島県 やまなみ文化ホール

詳しい上映スケジュールはきょうされんホームページをご覧ください。
<http://www.kyosaren.or.jp/>
 きょうされんではすべての市町村での上映会開催をめざしています。

お問い合わせは：きょうされん事務局
 電話03-5385-2223



3月1日にスタートした上映会
 (三鷹ひまわり
 主催/東京・国分寺市)



権利条約の採択までの経過
 を基調報告



パネルディスカッション「条約批准でどう変わる。どう変える。私たちの暮らし」

埼玉県で障がい者のための 「賞」を新設

埼玉県は、障がい者でありながらも不屈の努力を続け、顕著な活躍をしている方や、障がい者支援に貢献している方に贈る障がい者のための賞「塙保己一賞」を創設しました。塙保己一（はなわほきいち）は、幼くして失明したにもかかわらず、学問の世界で国家的大事業を成し遂げた、埼玉県が生んだ江戸時代の国学者です。

偉人ヘレン・ケラーが来日した際、「埼玉ゆかりのハナワ・ホキイチ先生を目標にがんばることができ、“今の私”がある」と講演会で語られたように、障がいのある方にも塙保己一を知り、夢や希望を持ってがんばってほしいという願いが込められています。

第1回の表彰式が1月26日に保己一の出身地である埼玉県本庄市で行われ、「大賞」本間昭雄さん(東京都青梅市)、「奨励賞」綱川泰典さん(埼玉県川越市)、「貢献賞」川野楠己さん(神奈川県横浜市)、「特別賞」斉藤政雄さん(東京都渋谷区)のみなさんが受賞されました。



財団の山崎理事長は賞の選考委員に加わっています。

主催者のあいさつをされる埼玉県上田知事(舞台左側に受賞者)

地域から発信！ 障害者権利条約の批准に向けて

世界で6億5000万人を超える障がい者に対する差別を撤廃し、社会参加を促進することを目的に、2006年12月13日、「障害者権利条約」が国連総会で採択されました。翌年9月28日には国連本部において日本政府も「障害者権利条約」に署名し、現在批准に向けた国内法の整備を進めています。

「批准に向けて権利条約の理念を国内法にどのように反映させるのか」。障がい者の暮らしに直接かわる課題だけに、日本障害フォーラム*では、より広く障がい者に情報を提供する地域フォーラム「障害者権利条約の批准に向けて地域より発信」を開催しています。3月29日に札幌市社会福祉総合センターで開催された地域フォーラムも情報を求める障がい者らで満員の大盛況。特に権利条約の条文の解説では、熱心に聞き入る姿が目立ちました。今年は3ヵ所で地域フォーラムを開催し「障害者権利条約」の批准に向け、当事者の目線からさらに盛り上げていく予定です。

この活動には、ヤマト福祉財団・麒麟福祉財団・損保ジャパン記念財団の3団体が合同で助成を行っています。

*日本障害フォーラム(JDF)／2004年設立、国内の全国レベルの12の障害者団体・関係団体で構成

中東オマーンのハイサム殿下 スワン 赤坂店を視察

4月1日 外務省賓客として来日した遺産文化大臣ハイサム殿下を筆頭に、駐日オマーン大使以下6名のオマーン国視察団が急遽スワンベーカリー&カフェ赤坂店に来店されました。ハイサム殿下は、本国で障がい児施設を全面支援。やがて成人する障がい者の仕事づくりの答えを見つけるべく、熱心に視察されました。カフェラテに浮かぶ模様にしばし感嘆。言葉を越えて、遠い中東の国の賓客をおもてなしすることができました。



ハイサム殿下（左から2番目）とコーヒーのおもてなしをした安室さん

新潟に待望の スワンカフェ&ベーカリー 5月17日、オープン

スワンベーカリーチェーンの空白地であった新潟に新しくオープンします。新潟市の（株）豊栄運輸倉庫・社長の廣上健二郎氏が、恵まれない障がい者の状況をまのあたりにして、働く場づくりと支援の強化の一環として、スワンカフェ&ベーカリーを開店することにされたものです。5月17日のオープンを予定しています。



スワンカフェ&ベーカリー新潟店の完成イメージ

お問い合わせは：スワンベーカリー本部まで
電話03-3543-1067

フードビジネスの展開に確信 フィリピンNFCPWD事務局長、 スワンに来店

フィリピンでの新事業開拓のため、全国障害者協同組合連盟（NFCPWD）事務局長ジョニー・ランションさんが来日。3月31日、スワンベーカリー銀座店とスワンカフェ銀座店を訪問しました。パン作りや接客対応などの職域に進出している障がい者の姿を見て、大きくうなずいたランションさん。本国では、公立学校に納入する机と椅子を製造する仕事を協同組合で請け負っています。その年の納入が終わると半年間仕事なくなることが悩みの種。日々の暮らしに直結したフードビジネスは大きな魅力です。しかし、障がい者がこの仕事に関わることにまだ理解が進んでいないフィリピンでも、環境を整えれば必ず実現できる。スワンでの刺激は期待から確信へと変わりました。



店内のパンを見ながら質問するランション事務局長。パンはフィリピンでも身近なものだけに期待が大きい

「身体障がい者の仕事も不十分。知的障がい者と精神障がい者については、全く手付かずの状態です。」とフィリピンの状況を話すランション事務局長



伊東屋様のカレンダー 社員のみなさんのおかげで 善意が形になりました

東京・銀座の伊東屋様から今年もカレンダーのご寄付をいただき、ヤマト運輸の支社・主管支店で販売しました。37万1522円の収益金は、全額をヤマト自立センターに寄付。障がい者の就労移行支援のために役立てます。伊東屋様、販売に協力いただいた社員のみなさま、ありがとうございました。



ヤマト自立センターへ収益金を贈呈



読売新聞 1月7日

スワンペーカリー北浦和店が 読売新聞に



④

パン屋の朝は早い。午前6時、店長の飯塚綾乃さん(26)は、オーナー社長の父・哲朗さん(60)と車に乗り、JR北浦和駅前の「スワンペーカリー北浦和店」へ向かう。

到着すると、まず発酵させたパン生地を切り分け、形を整える。午前8時の開店後、混雑すればレジにも立つ。従業員16人のうち、人が精神・知的障害者たち。売り上げを計算して帰路につくのは午後9時を過ぎる。

哲朗さんは日中、営業や販売に出ることが多く、自宅と店の往復30分の車中は、2人で仕事の相談ができる貴重な時間だ。

「オーナー、パンの仕上げ担当の従業員にオーナーなども任せたいのですが」「大丈夫かな」「そろそろ彼にも新しい

障害者に働く場所提供



店の奥でパン生地の形を整える飯塚綾乃さん(左)と父・哲朗さん(スワンペーカリー北浦和店で)

夢のパン屋 父娘で経営

仕事にチャレンジしてもらいたいのだ。

「じゃあ、任せよう」

親子で店を切り盛りして1年2か月。綾乃さんはいつの間にか、哲朗さんを「オーナー」と呼ぶようになっていった。

その方がお互いに率直に仕事の話ができて、「お父さん」と呼ぶのが、いつか甘えてしまう気がする。

眼鏡の父から「早期退

職」を打ち明けられたのは2002年の秋。「パン屋をやる。就職が難しい精神・知的障害者を店に雇い、働く場所を提供したい」と、説く父に、母も兄も驚いた。

障害者福祉課長だった哲

退職すると、母親が体調を崩し、翌年2月に56歳で他界した。頼りの伴侶を失い、打ちひしがれる父を見て、「このまま一人で再出発させるわけにはいかない」と思った。

足りない、店内で慣れない接客やレジに追われる父を見て、胸が熱くなった。「お母さんを失い、店もダメだった。お父さんがあまりにかわいそう……」

そんな窮地を救ったのは、母の葬儀や開店時にも駆け付けてくれた父の元同僚たち。父は店に来ては、血洗いや掃除を賣って出てくれた。お客からの「おいしかった」の一言も、懸命に働く従業員の頑張りもうれしかったが、何より同僚に慕われている父が誇らしく、頼もしく見えた。

朗さんは、身体障害者 compared to 精神・知的障害者の就職が厳しい現状を肌で感じていた。県庁に30年余り勤務し、何を残せたのか疑問もあった。障害者でも働けるように製造方法を工夫したパン屋チェーンがあることを知り、「実践の場で障害者雇用に力を尽くそう」と考えたのだ。

そのころ綾乃さんは短大を卒業し、実家近くの運送会社で事務をしていた。福祉に興味を持ち、保育士の資格も取ったが、父の「第二の人生」にさほど関心はなかった。

ところが、03年春に父が

これまで何不自由なく好き放題やらせてくれた両親に、自分は何か一つでも返したことがあったろうか。考えた末、父の夢をかかなるために手伝おうと決めた。

哲朗さんは資金を工面し、店の立地先を探し、パンの専門校に通った。綾乃さんも、専門校やパン屋で2年半ほど修業を積んだ。

06年11月によろやく開店。が、喜びもつかの間、1週間もたずに、あまりの忙しさから男性社員2人が辞めてしまった。人手が

足らず、店内で慣れない接客やレジに追われる父を見て、胸が熱くなった。「お母さんを失い、店もダメだった。お父さんがあまりにかわいそう……」

そんな窮地を救ったのは、母の葬儀や開店時にも駆け付けてくれた父の元同僚たち。父は店に来ては、血洗いや掃除を賣って出てくれた。お客からの「おいしかった」の一言も、懸命に働く従業員の頑張りもうれしかったが、何より同僚に慕われている父が誇らしく、頼もしく見えた。

昨年11月からは1回、従業員らと店近くの道路の清掃を始めた。「障害者は支えられるだけでなく、地域を支えることで認められなければ」との持論を持つ父のアイデアだ。

スワンペーカリー。そこは社会人としての父の素顔に初めて出会った場所。綾乃さんはしばらく、父、いやオーナーから、いろんなことを学ばせてもらうつもりだ。

(八木陽介)

あの名作から、 知られざる原点まで



〈赤毛の若い娘 (ジャンス・エビュテルヌ)〉
1918年 油彩・カンヴァス 個人蔵



〈トック帽をかぶったX夫人 (かつらを着けた女)〉
1916年 油彩・カンヴァス 個人蔵



〈ビエール＝エドゥアール・パラノフスキ〉
1918年 油彩・カンヴァス 個人蔵



〈ジャンス・エビュテルヌ〉
1918年 油彩・カンヴァス 個人蔵

モディリアーニ展

開催期間 ▶ 2008年3月26日(水)～6月9日(月)
休 館 日 ▶ 毎週火曜日(ただし、4月29日(火)、5月6日(火)は開館。翌日の4月30日(水)、5月7日(水)を休館)

開催場所 ▶ 国立新美術館
● 東京メトロ千代田線「乃木坂駅」
6出口(美術館直結)
● 東京メトロ日比谷線「六本木駅」
4a出口から徒歩5分
● 都営地下鉄大江戸線「六本木駅」
7出口から徒歩4分

開館時間 ▶ 午前10時～午後6時
※ 金曜は午後8時まで
(入館は閉館の30分前まで)

観覧料金 ▶

	一般	大学生	高校生
当日	1,500円	1,200円	700円

- 障がい者手帳をご提示の方とその介護者1名は無料になります。
- 中学生以下は無料。

主 催 ▶ 国立新美術館、日本経済新聞社

問い合わせ先 ▶

- ハローダイヤル 03-5777-8600
- 展覧会ホームページ <http://modi2008.jp/>

巡回情報 ▶ 国立国際美術館(大阪) 2008年7月1日(火)～9月15日(月・祝)

Information
of the Art

20世紀初頭、パリのモンパルナスで活躍したアメデオ・モディリアーニ(1884～1920)は、エコール・ド・パリを代表する画家の一人ですが、モディリアーニがアフリカや東南アジアなどのプリミティヴ美術(原始美術)に関心を寄せていたことはあまり注目されてきませんでした。本展では、プリミティヴ美術の影響を示す「カリアティッド」の作品群から、独自の様式を確立した肖像画にいたるまで、モディリアーニの芸術がいかに変遷をとげたのかを探っていきます。

世界中から集められた油彩・素描約150点が出品され、国内では最大級の展覧会となります。このモディリアーニ展の美術品取り扱いをヤマトロジステイクス株式会社が協力しています。

ヤマト福祉財団全国支部連絡先(ヤマト運輸(株)内)

支 部	事 務 長	連 絡 先
北海道支部	加藤房男	TEL.011-891-5040
東北支部	平井 忠	TEL.022-374-8065
東京支部	名古屋健史	TEL.03-5564-3705
関東支部	森田雅哉	TEL.045-508-6106
北信越支部	青木浩昭	TEL.025-231-9512
中部支部	矢野静香	TEL.052-725-3633

支 部	事 務 長	連 絡 先
関西支部	石田久雄	TEL.06-6682-8570
中国支部	竹下憲雄	TEL.082-849-1451
四国支部	内山 修	TEL.0877-46-7875
九州支部	目野和彦	TEL.092-931-3340
沖縄支部	古謝盛裕	TEL.098-840-3605

賛助会員 個人52,154人 法人ヤマトグループ45社(2008年3月31日現在)